オンラインシンポジウム

第８回
「未来志向の日本語教育」

2024 年 2 月 9 日（金）

13:50~17:00（日本時間）

（開場 13:40、オンライン）

主催：	筑波大学 CEGLOC 日本語教育部門
共催	筑波大学　CEGLOC　日本語・日本事情遠隔教育拠点

趣旨

2019 年 2 月にシリーズとしてスタートした本シンポジウムは 21 世紀の刻々と変化する状況の中で日本語教育をどのように構想することができるのかを大きなテーマとし、幅広い分野の研究者に発表および意見交換の場を提供します。

口頭発表のテーマとして、ハイブリッド日本語教育の実践とその課題、AI を含む ICT ツールの利用方法、協働学習などを取り扱う発表を募集しますが、これらのテーマに限定せず、その他日本教育関連の内容も大歓迎します。なお、未発表のものに限定します。

発表者には筑波大学 CEGLOC 日本語教育部門が発行する『日本語教育論集』第 40 号に発表内容をまとめた原稿の投稿申込が可能です。

参加登録とアクセス

本シンポジウムはオンライン（Zoom）で開催され、参加は無料ですが、2024 年 2 月 6 日（火）（23：55 日本時間）までに参加登録をしてください。2024 年 2 月 7（水）までにミーティングのアクセスリンクを送信します。

参加登録フォーム

主催者・共催者ロゴ

筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター
日本語・日本事情遠隔教育拠点
The Center for Distance Learning of Japanese and Japanese Issues

シンポジウム実行委員会 Vanbaelen Ruth、文 昶允

問い合わせ先　vanbaelen.ruth.gp@u.tsukuba.ac.jp

プログラム概要

13:40~	**開場**：**Zoom にアクセス** 参加登録のうえ、2024 年 2 月 7 日までにミーティングのアクセスリンクが届かない場合は、<vanbaelen.ruth.gp@u.tsukuba.ac.jp>にご連絡ください。	
13:50~ 14:00	開会にあたり：**波多野博顕**（筑波大学　助教、CEGLOC 日本語・日本事情遠隔教育拠点　副拠点長）	
	口頭発表は2つのブレイクアウトルームで行われます。ご自由に移動してください。 3 つのラウンジを設けています。議論を続けたい方や、雑談したい方、ご自由にお使いください。 必ず **Zoom の最新バージョン（5.17.2 (9988)）以上）をインストール**のうえ、ご参加ください。	
	ブレイクアウトルーム①	**ブレイクアウトルーム②**
14:00~ 14:30	発表 1：**VO THI BAO ANH** ベトナム人エンジニアを対象とした日本語教育における直接法の効果―文法授業アンケート調査の報告―	発表 2：**栗原由加、関かおる** 参加型漢字学習システムの開発と検証
14:30~ 15:00	発表 3：**東平福美、鴻野豊子** 理系大学院におけるハイブリッド初級日本語授業の実践と課題	発表 4：**氏家雄太** 日本語文字手書き練習用フォント
15:00~ 15:30	発表 5：**黒田史彦、市江愛** 生成 AI を活用した多読用リソース開発の試み	発表 6：**Vu Ngoc Yen Nhi** AI 翻訳ツールの使用状況に関する調査と考察―ハノイ国家大学外国語大学の日本語学習者を対象に―
15:30~ 15:45	**休憩**	
15:45~ 16:15	発表 7：**萩原幸司、山田ボヒネック頼子、梅津由美子、酒井康子、高木三知子、鞠古綾** 「対話力を育成する能力」を高める OJAE 道場―世界中の日本語教師達が協働で鍛錬する場からの提言―	発表 8：**小中佳子** 帰国・渡日生徒への日本語学習支援の取り組み　校内サポートのシステム化と課題
16:15~ 16:45	発表 9：**田添暢彦** 話したいことを発見する―日中大学間オンライン動画交換の試み	発表 10：**保坂敏子、島田めぐみ、羽野美佳、山下志織** ウクライナ避難民児童に対するオンライン日本語学習支援―低学年児童にオンライン支援は可能か―
16:45~ 16:55	総括：**Vanbaelen Ruth**（筑波大学　准教授、CEGLOC 日本語教育部門長）	
17:00~ 17:30	**オンライン懇談会**	

プログラムの詳細は次ページに記載

プログラムの詳細

13:50~ 14:00	開会にあたり：**波多野博顕**（筑波大学　助教、CEGLOC 日本語・日本事情遠隔教育拠点　副拠点長）
14:00~ 14:30	発表 1：VO THI BAO ANH（Bach Viet Polytechnic College・教師）、NGUYEN THI HUYEN（金沢大学・大学院生） **ベトナム人エンジニアを対象とした日本語教育における直接法の効果―文法授業アンケート調査の報告―** 日本で就労している、または就労を希望しているベトナム人エンジニアには専門能力はもちろんのこと、高度人材として日本語能力、特に会話力が求められている。要求されている会話力を効率よく習得するには、直接法による授業が効果的と考えられている。一般的に、エンジニアは左脳が右脳より強いという特徴により外国語が苦手だと思われているために、本研究ではベトナム人エンジニアを対象とした文法授業において直接法の導入の効果をアンケート調査方法で検証した。 各質問は次のようなカテゴリーにまとめた。 ・調査対象の属性の質問群　・目的の授業の情報の質問群 ・直接法の評価の質問群　　・直接法の効果の質問群 行われたアンケート調査の結果より直接法の効果が明らかになった。
	発表 2：栗原由加（神戸学院大学　グローバル・コミュニケーション学部・教授）、関かおる（神田外語大学教育イノベーション研究センター・講師） **参加型漢字学習システムの開発と検証** 本研究が取り組むテーマは、非漢字系の日本語学習者を対象とした漢字語彙学習である。非漢字系の日本語学習者にとって、漢字学習は日本語学習のハードルの一つとなっている。まず、習得すべき漢字数の多さと学習の労力が、日本語学習の継続を難しくしているという問題がある。また、日本語学習者の多様化に伴い、十分な学習環境が整わない日本語教育現場が増加しているという問題もある。文字教育研究会は、このような問題を解決する目的で、参加型の漢字学習システムを開発し、検証を行っている。このシステムでは、学習者がネットワークで繋がり、スマートフォンを使って教材作りに参加する。また、制作、蓄積された教材をデータベースから自由に検索し、自律的に学習を進めることができる。本発表では、このシステムの構想、仕組み、利点、課題について説明し、現在進行中の検証により明らかになった事項を報告する。［科学研究費助成事業基盤研究 C（21K00640）］
14:30~ 15:00	発表 3：東平福美（東京大学工学系研究科社会基盤学専攻日本語教室・非常勤講師）、鴻野豊子（東京大学工学系研究科社会基盤学専攻日本語教室・非常勤講師） **理系大学院におけるハイブリッド初級日本語授業の実践と課題** 東京大学工学系研究科社会基盤学専攻日本語教室では新型コロナウイルス感染症流行下より全てオンライン授業となったが、現在はオンラインと対面を組み合わせたハイブリッド授業となっている。本発表では以前の対面授業と比較しつつ、現在のハイブリッド授業の具体的な実践報告を行う。 本専攻では大学院留学生の本分は専門の研究であるが、日本語学習も研究と密接に関係しているという共通認識があり、留学生には週 5 日（または 3 日）で日本語学習を課してきた。その結果、学生の負担になっているという負の側面が長くあったが、その負担を軽減し、研究の隙間時間での日本語学習を可能にしたのがオンラインであった。現在は文化体験、作文指導、定期試験等を対面で、それ以外はオンラインで行うことで、学生のスケジュールに大きく負担をかけず、継続的な日本語学習を可能としている。本発表を通じて、ハイブリッド日本語教育とは何か、改めて検討を行いたい。

	発表 4：氏家雄太（フリーランス・オンライン日本語教師） **日本語文字手書き練習用フォント** 日本語学習者のための“読みやすい手書き文字”練習用フォントを開発した。 以前学習者の書いた文字に違和感を持ち、原因がお手本にあることに気付いた。テキストの文字は毛筆体が基本である。そのためペンや鉛筆でお手本通り丁寧に書こうとすると余計な装飾部分が現れ、かえって文字が不自然な形になってしまう。 開発したフォントは母語話者や学習者の文字や意見を参考にした、装飾を省いたシンプルな書体で、学習者はシとツ・ソとン等もはっきり識別し書き分けられるようになる。同時にマス目や筆順も表示されるため自律学習にも適している。 Word や PowerPoint 等のソフト上で扱えるので、教師は学習者に合った練習教材を簡単に作ることができる。加えてかな・漢字の筆順 GIF 動画も作成した。これを使えばオンラインでも手間なく書き方を伝えることができる。 現時点ではこのフォントは未公開であるが、学習者の文字習得、及び教師の教材作りに大きく寄与できると考えている。
15:00~ 15:30	発表 5：黒田史彦（東京都立大学・教授）、市江愛（東京都立大学・特任助教） **生成 AI を活用した多読用リソース開発の試み** 本発表では、日本語多読用リソースの作成にあたり、生成 AI の果たしうる役割について検討する。特に、生成 AI を用いて昔話をリライトし、不足が指摘されることの多い初級レベルの多読用リソースの作成を試みた。そして、作成されたリライト成果物における日本語の難易度などを測定した。さらに、生成 AI によるリライトの際に、どのようなプロンプトを用いるかによって、リライト成果物の難易度などにいかなる影響が生じるのか、調査・分析を行った。その結果、現時点では、リライト時における難易度の細かい調整は不十分ではあるものの、初級レベルの多読用リソースを高い生産性をもって作成できることがわかった。同時に、リライト成果物における表記や著作権の問題なども浮き彫りになった。本発表を通じ、生成 AI による多読用リソース作成の現状を共有し、現時点における問題点の発見と解決、今後の可能性について意見交換できることに期待している。
	発表 6：Vu Ngoc Yen Nhi（ハノイ国家大学外国語大学・講師） **AI 翻訳ツールの使用状況に関する調査と考察—ハノイ国家大学外国語大学の日本語学習者を対象に—** AI 翻訳ツールは急速な技術進歩と共に注目を集め、外国語学習者に非常に身近なツールであるが、未だ AI 翻訳ツールの使用上には議論が行き交っている。そこで本研究ではハノイ国家大学外国語大学の日本語学習者を対象とし、AI 翻訳ツールの使用状況、有効性、課題と対策等に関する調査を実施した。その結果、被調査者の 7 割以上が大学での日本語学習に AI 翻訳を使用し、語句の意味検索や文章の即座翻訳等が主な目的であることが明らかになった。AI 翻訳の利用者は、従来の翻訳ツールに比べ、不便さや訳出の問題に自ら対処策を模索し、積極的で自律的に学習を進めることが調査で明らかになり、学習態度に変化をもたらすと強調される。しかし、AI 翻訳ツールに過度に依存することが懸念されている。以上のことから、AI 翻訳は主体的な学習支援ツールとして活用できる一方で、訳出の正確性を確認できない点及び依存性に調査者が不安を感じており、今後も研究が必要である。
15:30~ 15:45	休憩

15:45~ 16:15	発表 7：萩原幸司（城西国際大学・准教授）、山田ボヒネック頼子（ヨーロッパ日本語教育学研究所・代表）、梅津由美子（ベルリン日独センター・講師）、酒井康子（ライプツィヒ大学・言語学院・講師）、高木三知子（ブラッセル補習授業校・教員）、鞠古綾（ヴェネツィア・カフォスカリ大学・日本語講師） **「対話力を育成する能力」を高める OJAE 道場―世界中の日本語教師達が協働で鍛錬する場からの提言―** 本発表では、発表者自身が開発した方法論を用いて、協働で鍛錬する教師研修を紹介し、そこで得られた実践知を提示する。発表者は、口頭テストを超えた対話力育成法として CEFR 準拠 OJAE（Oral Japanese Assessment Europe）を 2010 年に完成させ、発展させてきた。近年、日本語教師の新たな専門性として対話力の育成が求められていながら、教師自身に学習者の対話力を育成する能力が備わっていないという反省があった。そのため、2021 年、世界中の多様な日本語教師達が OJAE を基に「対話力を育成する能力」を高める場として、オンライン上に OJAE 道場が開設された。OJAE では，アセスメント中に顕れる学習者の対話力を独自の観点で見出し、伸ばしていく。研修ではそれらの実例を基に、参加者は対話の芽の発見と育成を追体験するのである。そこでの実践から、教師による対話力の見出し方、育み方を共に考えたい。
	発表 8：小中佳子（関西学院千里国際中等部・高等部・ブリッジングセンター長・国語科教諭） **帰国・渡日生徒への日本語学習支援の取り組み　校内サポートのシステム化と課題** 「帰国・渡日生徒への日本語学習支援の取り組み　校内サポートのシステム化と課題」 日本語での学習に困難のある生徒は増加傾向にある(文科省，2022)が、日本語教師の確保が難しい場合、本人や家庭、そして教員それぞれが個別に試行錯誤しながら対応にあたってきた。帰国生受入校として多くの帰国生が在籍している関西学院千里国際中等部高等部(本校)は、日本語での学習に困難な生徒に対し 2022 年から組織的な支援の実施を開始した。具体的には専門部署を立ち上げ、1生徒の情報共有、2授業内での支援、3授業外での学習支援、4授業外での日本語支援、5授業外での生活支援を行なった。支援を行なってみて、教員間の支援ネットワークの構築と、生徒本人と日本語話者である教員やクラスメイトとの信頼関係の構築が、生徒の日本語学習意欲を高めることに役立つことが分かった。本校での取り組みを元に、学校における組織的な支援と日本語学習の在り方について考察する。
16:15~ 16:45	発表 9：田添暢彦（西安交通リバプール大学・語学講師） **話したいことを発見する―日中大学間オンライン動画交換の試み** 本発表では、日中の大学の日本語・中国語クラス間でのオンライン掲示板パドレットを通した交流活動について報告する。発表者が所属する中国の大学の日本語クラスでは、スピーキングのタスクが暗唱になってしまう傾向があった。そこで、自由な発話につなげる活動として、日本の大学の中国語クラスとの交流を計画した。学生は露天商、スーパーの鮮魚売り場など日常を題材として動画を撮影し、パドレットに投稿した。非同期型の交流を選択することで、動画撮影を通じた発話練習、繰り返し視聴による聞き取り練習の機会が増えるようにした。中国で使用できるアプリケーションの制約はあるものの、ICT を活用した一定の交流活動ができ、アンケートのコメントからは、双方の文化を知る良い経験になったといった学生の満足が見られた。その一方で、今後の有効なファシリテーションの検討や実際の語学力の伸びの検証が課題として残った。

	発表 10：保坂敏子（日本大学大学院総合社会情報研究科・教授）、島田めぐみ（日本大学大学院総合社会情報研究科・教授）、羽野美佳（日本大学大学院総合社会情報研究科・修了生）、山下志織（日本大学大学院総合社会情報研究科・修士 2 年） **ウクライナ避難民児童に対するオンライン日本語学習支援―低学年児童にオンライン支援は可能か―** 本研究の目的は、ウクライナ避難民の低学年児童を対象に実施したオンライン日本語学習支援の内容と方法，さらにオンライン学習を支える要素を明らかにすることである。発表者らは 2022 年 6 月から当時小学校 1 年生の児童に対し、受け入れ先の地方自治体の教育委員会や小学校と連携しながら、オンラインによる日本語学習支援を続けている。1 年半余り経過した現在、受け入れ先から日本語学習のみならず、教科学習面でも成果を上げているとの評価を得ている。低学年児童には難しいとされるオンライン日本語学習支援が今回なぜ有効に機能したのか。この問いに対して、作成した教材と指導担当者へのインタビューデータを分析し、本実践の内容と経過を明らかにして支援における留意点や成功の要因を探った。その結果、低学年児童の認知レベルと学習の動機づけへの配慮、避難民に係る配慮、オンライン学習を支える環境の整備が主要な要因として浮かび上がった。
16:45~ 16:55	総括：Vanbaelen Ruth（筑波大学　准教授、CEGLOC 日本語教育部門長）
17:00~ 17:30	オンライン懇談会